

毎日のように校長室にやってくる生徒がいる。Mさんである。必ずタブレットを抱えている。なぜか。そのタブレットには、Mさん作の小説が打ち込まれているからである。毎日、自分の作品を見せるためにやってくる。

Mさんが作品の中で使っている言葉は、かなりレベルが高い。一般の中学生では、なかなか真似できるものではない。語彙レベルが高い。作品の舞台設定も、毎回ユニークである。Mさんの短編集ともいうべき作品集である。

Mさんは、毎日、創作活動を行っている。この創るという作業を毎日続けるというのがすごい。Mさんを見ていると、創作活動の原点を見ているような気がする。作品には、Mさんの心、思い、願いが反映されている。作風とでもいうのだろうか。

小説家の太宰治、画家のゴッホ、作曲家のベートーヴェンなど、制作時期によって、その作風が変わっている。例えば、太宰治である。『人間失格』や『斜陽』が太宰らしい作品だが、教科書に載っている『走れメロス』は、ちょっと違った味わいの作品である。

Mさんの作品も、一時期、雰囲気が変わった。「しばらく、この感じで書いてみたら」とアドバイスした。短編集だからこそ、できることである。しばらくは、同じ雰囲気が続いた。年が明け、また作風が変わった。Mさんの中で進化しているのかもしれない。

Mさんは、話していても大人である。自分のことを客観的に分析して話すことができる。深く物事を考えている。人一倍、考えることができるからこそ、苦しくなることもある。悩みも多い。それが、創作活動へと向かわせるのかもしれない。Mさんの場合の創作活動が、短編小説である。

毎回、いろいろな話をする。あるとき、12月末頃だったか、心理学の話になり、アドラー心理学を紹介した。「アドラー心理学は、知っておいた方がいいよ。きっとあなたの役に立つよ」早速本屋さんに行って、アドラー心理学の本を買って読んでみるということになった。

どうやら、すぐに本屋さんに行き、本を購入し、一気に読んだらしかった。Mさんは、心理学の本が読める人なのである。「哲学もいいよ」とアドバイスした。「はじめての哲学」のような本もいいが、『14歳からの哲学』を紹介した。きっと、Mさんは、楽しく興味をもちながら読んでくれることだろう。

私には、創作に向かうようなパッションはない。Mさんにはかなわない。Mさんは、校長室に入るときに、「息抜きに来ました」と言うことがある。校長室で息抜きをしている中学生がMさんである。それだけ、いろいろなことを抱えているということだろう。これから、Mさんの作風が、どのように変わっていくのか楽しみである。近いうちに、短編集が完成する日を待ち望んでいる。